

お姫さまと乞食の女

小川未明

青空文庫

お城しろの奥おく深ふかくお姫ひめさまは住すんでいられました。そのお城しろはもう古ふるい、石垣いしがきなどがあるところどこ崩くずれていましたけれど、入り口いぐちには大おおきな厳いかめしい門もんがあつて、だれでも許ゆるし
がなくては、入はいることも、また出でることもできませんでした。

お城しろは、さびしいところにありました。にぎやかな町まちへ出でるには、かなり隔へだたつていま
したから、木きの多い、人里ひとさとから遠とほざかつたお城しろの中なかはいつそうさびしかつたのでありま
す。

お城しろの中なかには、どんなきれいな御殿ごてんがあつて、どんな美うつくしい人々ひとびとが住すんでいるか、だ
れも知しつたものがなかつたのです。旅人たびびとは、お城しろの門もんを通り過すぎるときに、足あしを止とめて
お城しろのあちらを仰あおぎました。けれど、そこからは、なにも見みることができませんでした。
「なんでも、きれいな御殿ごてんがあるということだ。」と、一人ひとりの旅人たびびとがいいますと、
「美うつくしいお姫ひめさまがいられて、いい音楽おんがくの音色ねいろが、夜よるも昼ひるもしているということだ。」
と、また他たの一人ひとりの旅人たびびとがいつていました。

こうして、旅人たびびとは、いろいろなうわさをしながら、そのお城しろの門もんの前まえを去さつてしまつ
たのであります。

お城しろの中には、美しい御殿ごてんがありました。そして御殿ごてんの一室しつに、美しいお姫ひめさまが住すんでいられて、毎日まいにち、歌うたをうたい、いい音色ねいろをたてて音楽おんがくを奏そうせられ、そして、窓まどぎわによりかかつては、遠くとおの空そらをながめられて、物思ものおもいにふけていられました。そのことはだれも知しることができなかつたのです。

お姫ひめさまは、このお城しろの中で大きくなられました。そして、このお城しろの内うちしかお知しりになりませんでした。お城しろの中には、大きな林はやしがありました。また、大きな濠ほりがありました。林はやしの中には、いろいろな鳥とりがどこからともなく集あつまってきて、いい声こえでなっていました。

またお濠ほりや、池いけの中には、珍しい魚うおがたくさん泳およいでいました。そのほか、御殿ごてんの中には、この世よの中なかのありとあらゆる珍めずらしいものが飾かざられてありました。けれどお姫ひめさまは、もはや、そんなものを見るみことに飽あきてしまわれました。

「ああ、わたしは、このお城しろの中にばかりいることは飽あきてしまった。このお城しろの中なかから外そとへ出てみたいものだ。」と、お姫ひめさまは思おもわれました。

このことをおつきのものに話はなされますと、おつきのものは、びっくりして、目めを円まるくしていました。

「それはとんでもないことです。このお城しろの内うちほどいいところは、どこへいってもありま

せん。お城しろの外そとに出ますと、それはきたないところや、暗くらいところや、また悪い人わるにんげん間まなどがたくさんにいまして安心あんしんすることができません。お城しろのうちほど、いいところかどこにありますがですか。」と申しました。

しかし、お姫ひめさまは、だれがなんといっても、やはり、お城しろの外そとに出て、世よの中なかというものを見たいと思われしました。

「世よの中なかというところは、どんなところだろう。そこには、にぎやかな町まちがあるということだ。その町まちへいったら、きつと自分の知しらないおもしろいことがたくさんにあるに相違さういない。そして、いろいろな歌うたを聞きかれるにちがいない。どうかして、わたしは、その世よの中なかを見たいものだ。」と、お姫ひめさまは思おもわれたのであります。

林はやしの中なかには、いろいろな小鳥ことりがきてさえずっていましたけれど、その小鳥ことりは、もはやお姫ひめさまには珍めずらしいものではなかったのです。しかるに、あるとき、遠とおい南みなみの方ほうから渡わたつてきたという、赤あかと緑みどりと青あおの毛色けいろをした、珍めずらしい鳥とりを献けんじょう上じょうしたものがありません。

お姫ひめさまは、この鳥とりが、たいそう氣きにいられました。そして、自分じぶんの居間いまに、かごにいられて懸かけておかれました。小鳥ことりは、じきにお姫ひめさまになれてしまいました。しかし、小鳥ことりも、自身じしんの生うまれた、遠とおい国くにのことをときどき、思おもい出だすのであります。かごの中なかの

とまり木に止まつて、遠くの青い、雲切れのした空をながめながら、悲しい、低い音色をたててないのであります。するとお姫さまも悲しくなつて、涙ぐまれたのであります。そして、やはり、あちらの空を見ていられますと、白い雲が夢のように飛んでゆくのであります。

「おまえは、なにをそんなに考えているの？　しかし、おまえはこんなに遠い他国にくるまでには、さだめしいろいろなところを見てきたらうね。町や、海や、港や、野原や、山や、河や、また珍しいふうをした旅人や、その人たちの歌う唄などを聞いたり、見たりしてきたにちがいない。しかし、わたしは、そんなものを聞くことも見ることもできない。」

お姫さまは、こういつてなげかれたのであります。

お城の内には、さびしい秋がきました。つぎに木の葉のことがとく落ちつくしてしまう冬がきました。いろいろな木の実が紅く熟し、それが落ちてしまふと雪が降りました。そして、しばらくたつとまた、若草が芽をふいて、陽炎のたつ、春がめぐつてきたのであります。

お城の内には、花が咲き乱れました。みつばちは太陽の上の前から、花の周囲に集

まって、羽はねを鳴ならして歌うたっていました。ほんとうに、のびのびとした、いい日和ひよりがつづき
 ましたので、お城しろの門番もんばんは、退屈たいくつしてしまいました。どこからともなく、柔やわらかな風かぜ
 が花はなのいい香かりを送おくつてきますので、それをかいでいるうちに、門番もんばんはうとうと居眠いねむ
 りをしていたのであります。

ちようど、そのとき、みすばらしいようすをした女おんなの乞食こじきがお城しろの内うちへ入はいつてきました。
 女おんなの乞食こじきは門番もんばんが居眠いねむりをしていましたので、だれにもとがめられることがなく、草履ぞうり
おとの音もたてずに、若草わかくさの上うえを踏ふんで、しだいしだいにお城しろの奥おく深く入はいつてきたのであ
 ります。

お姫ひめさまは、おりから、怪あやしげなようすをした女おんながこちらに近ちかづいてくるのをごらんにな
 りました。そして、よくそれをごらんになると、自分じぶんと同じ年おなごろの美うつくしい娘むすめでありま
 した。お姫ひめさまはこんなに美しい娘むすめが、どうして、またこんなに汚きたならしいようすをしてい
 るのかと怪あやしまれたのです。

「おまえは、だれだ？」と、お姫ひめさまは、おたずねになりました。
 すると女おんなの乞食こじきは、悪わるびれずに、
 「わたしは、貧まずしい人間にんげんです。親おやもありませんし、家うちもないものです。こうして諸方しよほう

を歩いて、食べるものや、着るものをもらって歩く人間なのでございます。」と答えました。

お姫さまは、その話を聞いていられる間に、幾たび、びつくりなされたかしれません。そして、この女が、乞食であることをはじめてお知りになりました。

「おまえは乞食なの？」と、お姫さまはお問いになされました。

「さようでございます。」と、汚らしいようすをした女は答えました。

お姫さまは、つくづくと女の乞食をごろんになっていましたが、小さな歎息をなされました。

「なんという、おまえの目は美しい目でしょう。」とおっしゃられました。

女の乞食は、お姫さまを見上げて、

「そんなに、わたしの目がよろしければ、あなたに、目をさしあげましょう。」と申しました。

お姫さまは、なおつくづくと女の乞食をごろんなされていたが、小さな歎息をなされて、

「まあ、なんというおまえの髪の毛は美しいのだろう。」といわれました。

女おんなの乞食こじきは、長い、黒い髪かみの毛けを手でかきあげながら、

「わたしの髪かみの毛けが、そんなによろしければ、あなたにさしあげましょう。」と申しました。

お姫ひめさまは、前後ぜんごのわきまえもなく、女おんなの乞食こじきに抱だきつかれました。

「ああ、なんというおまえの心こころはやさしいのでしょう。目めも髪かみの毛けもみんなおまえのもので、だれもおまえから取るとことができはしない。わたしがどうして、これをおまえからもらうことができましょう。わたしは、それをほしいとは思おもいませんが、どうか、おまえのきている着物きものをおくれ。そして、おまえは、わたしの着物きものをきて、わたしのかわりとなつて、しばらく、このお城しろの内に住すんでいておくれ。わたしは、おまえになつて、広い世よの中なかを見てきたいから……。」と、お姫ひめさまは、女おんなの乞食こじきにむかつて、ねんごろに頼たのまれました。

女おんなの乞食こじきは、下したを向むいて、しばらく考かんえていましたが、やがて顔かおを上げ、

「お姫ひめさま、わたしは、なんでもあなたのおつしやることを聞ききます。しかし、わたしみたいなのが、お姫ひめさまのかわりとなつていことができましようか。」と申しました。

お姫ひめさまは、軽かるくうなずかれ、

「わたしがよく、侍女こしもとに頼たのんでおきます。そして、そんなに長ながくはたたない。じきにもどつてくるから、どうかわたしのいうことを聞きいておくれ。ぜひ願ねがいだから……。」といわれましたので、女おんなの乞食こしきは、ついにならずいて、お姫ひめさまのいうことを聞ききました。お姫ひめさまは、侍女こしもとをお呼よびになつて、そのことを話はなされますと、侍女こしもとは、びつくりして目めを円まるくしました。

「お姫ひめさま、そんなお考かんがえをお起おこしになつてはいけません。どんなまちがいがなくともかぎりません。」と、おいさめ申もうしましたが、お姫ひめさまは、どうかわたしの希望きぼうをかなえさせておくれ、きつとその恩おんは返かえすからといって、ついに、女おんなの乞食こしきに姿すがたをやつされまし

た。そして、城しろを立たちいでられることになりました。

門番もんばんが見みつけたら、またひと災難さいなんであろうと、お姫ひめさまは心配しんぱいをなされましたが、門番もんばんはこのときまで、まだいい心地こころに居眠いねむりをしていましたので、乞食こしきのふうをした若わかい女おんなが、自分じぶんの前まえを忍しのび足あしで通とおり過すぎたのをまったく知しらなかったものであります。

お姫ひめさまは、往來おうらいの上うへに出でられました。その道みちを歩あるいてゆくと、どこまでも道みちはつづいています。そして、ゆきつきるということがありませんでした。お城しろの内うちは、いくら広ひろくても、一日いちにちの中うちには、まわりつくしてしまふことができますのに、往來おうらいはどこまでい

つても、はてしがなかったのです。そればかりでない、青々とした野原や、花の咲く園などを右に左に見ることができました。緑色の空は、円やかに頭の上に懸かつて、遠く地平線のかなたへ垂れ下がっています。春風は、遠くから吹いて、遠くへ去っていきます。百姓が愉快そうに働いています。お姫さまは、なにを見ても珍しく、心も、身ものびのびとなされました。

「ああ、世の中というものは、なんという楽しいところだろう。」と、お姫さまは思われました。そして、いままでお城の内でした生活は、なんという窮屈な生活であつたろうと思われました。

あるところでは、山が見られました。また、あるところでは、大河が流れていました。その河には橋がかかっていました。お姫さまは、その橋を渡られました。すると、あちらに、にぎやかないろいろな建物のそびえている町があつたのであります。この乞食のようすをした、お姫さまに出あつた人々の中には、気の毒に思つて、お姫さまの側に寄つてきて、

「どうして、おまえさんは、そんなに若いのに乞食をするのですか？」と、聞いたものもありました。

お姫さまは、こういつて聞かれると、なんといつて答えたらいいだろうかとまどわれましたが、

「わたしには、両親もなければ、また家もないのです。」と、いつか乞食の女がいつたことを思い出して答えられました。

すると、その人は、たいそうお姫さまを気の毒に思つて、銭を出してくれました。

お姫さまは、旅費などは用意してきたので、べつにお金はほしくもなかったが、こうしてしんせつに知らぬ人がいつてくれるのを、あだに思つてはならないと思つて、深くお礼を申されました。

夜になったときに、お姫さまは、みんな自分のような貧しいようすをした旅人ばかりの泊まる安宿へ、入つて泊まることになされました。そこには、ほんとうに他国のいろいろな人々が泊まり合わせました。そして、めいめいに諸国で見てきたこと、また聞いたことのおもしろい話や、不思議な話などを語り合つて、夜を更かしました。また、それらの中には、自分と同じ年ごろの唄うたいがいて、マンドリンを鳴らして、いろいろな歌をうたつて、みんなを楽しませていました。

お姫さまはもとからマンドリンを弾くことが上手であり、また、歌をうたうことが上

手でございましたから、自分も、明日からは、唄うたいとなつて、旅をしようと思われました。夜が明けて、太陽が、花の咲いたように空に輝きわたりますと、その宿に泊まったすべての人々は、思い思いに旅をつづけて、散つていってしまいました。お姫さまは、それを哀しいことにも、また、たのしいことにも思われました。そこで、自分は、すっかり唄うたいのふうをして、この町を立つて、さらに遠い遠い、自由な旅をつづけることになされました。

お城の内に、お姫さまのかわりになつて残つた女の乞食は、その日から、なに不足なく暮らすことができましたけれど、退屈でしかたがありませんでした。

「いまごろ、お姫さまは、どうなさつていられるだろう。早く帰つてきてくださればいい。」と、明け暮れ思つていました。

女の乞食は、ふたたび、気ままな体になつて、花の咲く野原や、海の見える街道や、若草の茂る小山のふもとなどを、旅したくなつたのであります。

女は、柱にかかつている小鳥に目をとめました。その小鳥は、お姫さまがかわいがつていられた美しい小鳥でありました。小鳥は、かごの中でじっとして考えています。女は、顔をかごのそばに近寄せました。

「小鳥や、おまえも産まれたふるさとが恋しいだろう。さあ、わたしが、いまおまえを自由にしてあげるから、早く飛んでおゆき。」と、女はいいました。

そして、女は、お姫さまの大事にしていられた小鳥を、放してやりました。赤と、緑と、青の羽色をした美しい小鳥は、いい声でないて、お城の上を舞っていました。やがて雲をかすめてはるかに、どこへとなく飛び去ってしまったのであります。

お姫さまは、足にまかせて、いつでも、いつでも、はてしのない遠くへといつてしまつて、帰ろうと思つても、そこがどこやらまったくわからなくなつてしまつたのです。お姫さまは、自分の国をばたずねても、だれもその名を知っている人はなかつたのです。

「そんな国がどこか、遠いところにあるとは聞いたが、私どもはいつてみたことも、またはたしてほんとうにあるのかさえも知りません。」と、人々は答えました。

お姫さまは、悲しくなりました。たとえこうしていることが、どんなに自由であつても、ふるさとのことを思い出さずにいられなかつたのです。お姫さまは、いまは、ふるさとを恋しく思われました。晩方の雲を見るにつけ、空を飛んでゆく鳥の影を見るにつけ、ふるさとを思い出しては涙にむせばれていたものであります。

ある日のこと、お姫さまは、海の見える港のはずれで、独りマンドリンを弾き、ふるさ

との唄をうたつていられました。そこは、ずっとある島の南の端でありまして、気候は暖かでいろいろな背の高い植物の葉が、濃い緑色に茂っていました。女の人は、派手で、美しい日がさをさして、うすい着物を体にまとい路を歩いています。男の人は、白い服を着て、香りの高いたばこをくゆらして歩いていました。

お姫さまは、太陽の輝いた、海の面をながめながら、心をこめて唄を歌っていました。そのときお姫さまは、聞き慣れた、なつかしい小鳥の声を耳にされたのであります。それもそのはずのこと、お姫さまの大事にされていた小鳥は、かごと出て、自由な身になりますと、夜も昼も旅をして、自分の産まれた南の方の島に帰ってきたのです。

そして毎日、のどかな空に、舞いさえずりながら遊んでいますうちに、ある日のこと、下の方の港で、御殿にいた時分、お姫さまのよくうたわれた唄と、そしてまさしく、なつかしい同じ声とを聞いたから、そばの木におりてみたのであります。

すると、まちがいなくお姫さまでありました。小鳥はすぐに、お姫さまが国へ帰りたいたと思つても、その方角も、また道もわからなくて、困つていられるのを察したのであります。

「おお、きれいな小鳥だこと、あの鳥は、わたしの飼つていた鳥とよく似ている……。」

と、お姫さまは、目ざとくその鳥を見つけると、思われました。

小鳥は、すぐにお姫さまのそばまでやってきて、なつかしそうにくびをかしげてさえずつています。

「おお、おまえは、まさしくわたしの大事にしていた小鳥なのだ。どうして、ここへやってきたの？ わたしは、国へ帰りたいと思つても、道がわからなくて困つています。どうか、わたしをつれていっておくれ？」と、お姫さまは、小鳥に向かつて話されました。

それから、お姫さまは、小鳥について、その飛んでゆくままに、旅をされたのであります。

小鳥が、船のほぼしらの先に止まって鳴いたときに、お姫さまは、船に乗られました。そして、はるばると波路を揺られてゆかれました。小鳥が岸に上がつて、木に止まって鳴いたときに、お姫さまは、船から上がられました。そして、そこに休んでいたろばに乘られて、砂漠の中を過ぎられました。

お姫さまは、その道は、自分のきた時分に通つた道でないの、ほんとうに、故郷に帰ることができるようかと、不安に思われましたが、小鳥がどこまでもついていつてくれるのを頼りに旅を続けられていますと、ある日のこと、お姫さまは見覚えのあるお城の

森が、あちらにそびえているのをごらんになりました。

「おお、わたしはお城へ帰ってきた！」と、お姫さまは覺えず叫ばれました。

小鳥は、「いま、あなたは、なつかしいふるさとおへ帰りましたのです。あなたが、私をかわいがってくださいました、ご恩を返すために、ここまで、あなたをおつれ申しました。」といわんばかりに、木の枝に止まっていきました。

「ほんとうに、ありがとうございます。」と、お姫さまは、涙に輝いた瞳を上げて、小鳥をじつとごらんなさいますと、小鳥は、やつと安心をしたように、空高く舞い上がって、どこへともなく、雲を遠く飛び去ったのであります。

ちようどお姫さまが、お城を出られてから、三たびの春がめぐってきたのであります。その間に、どうしたことが、門番の姿は見えませんでした。お姫さまは、乞食の女のことかきにかかりながら、お城の内へとしずみがちに歩みを運ばれました。

「まあ、お姫さま、お帰りでございますか。」と、侍女は、お姫さまの姿を見ると、目にいっぱい涙をためて抱きつきました。

「おまえも無事でよかったね。そしてあの女はどうしました？」と、お姫さまも目に涙をためて聞かれました。

侍女は、声を忍んで泣きました。そして、

「お姫さま、まことに可愛いそうなことでございます。去年の春、御殿にお客がありました、ご宴会のございましたときに、殿さまから、お姫さまに歌をうたつて舞うようにとのご命令がありました。あの女は、そんな歌も知らなければ、また舞いもできませんでした。それを知らぬというわけにもいかず、その前夜、井戸の中に身を投げて死んでしまいました。」と申しました。

お姫さまは、あの女が、自分の身がわりになつたばかりに死んだことを、たいそうかわいそうに思われました。そして、女の身を投げて死んだという井戸のそばへいつて、深く、深く、わびられますと、その井戸のそばには、濃紫のふじの花が、いまを盛りに咲き乱れていたであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

初出：「童話」

1922（大正11）年4月

※表題は底本では、「お姫《ひめ》さまと乞食《こじき》の女《おんな》」となつています。

※初出時の表題は「お姫様と乞食の女」です。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：本読み小僧

2012年9月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

お姫さまと乞食の女

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>